

「文化継承」の大きな宿題



大見え——200年余りの伝統を受け継ぐ県指定無形民俗文化財の「横尾歌舞伎」＝浜松市北区引佐町、全日写真北原博さん撮影

富士山を眺めるだけで十分幸せだった多くの県民は、世界文化遺産になったことで大きな宿題をもらった。景観とともに、山にまつわる「文化」を後世に継承していくことである。

富士山のユネスコ登録と並行して、県は文化継承の拠点として富士宮市に「富士山世界遺産センター」の建設を計画。早期完成が宿題となったが、「逆さ富士」をイメージした奇抜なデザインなどで当初の事業費27億8千万円は3億円の増額が必要となり、ようやく昨年12月の県議会で認められた。

文化観光都市を目指す静岡市は昨年12月、「歴史文化施設」の基本構想をまとめた。県庁近くには事業費62億円で複合施設を建設。古代から現代に至る静岡市の歴史をたどる資料を展示し、郷土の英雄「家康」の時代なども再現する計画だ。開館は2021年度の予定だが、これで政令指定市なのに歴史博物館もない状況から脱却し、「文化継承」の宿題を果たせそうだ。

浜松市を中心とした県西部は豊かな歴史遺産の活用や継承で、地域創生につなげようとしている。来年のNHK大河ドラマ「おんな城主 直虎」のゆかりの地とあって、早くも観光ブームを当て込んでいる。

大河ドラマの主人公、井伊直虎の墓がある「龍潭寺」の近くに郷土芸能「横尾歌舞伎」の「開明座」がある。人口流出、少子化の中で約200世帯の住民が守り続ける農村歌舞伎は、文化継承の優等生だ。小中学生もいる保存会メンバーは秋の公演に向けて、6月ごろから週1回練習を続ける。江戸時代から200年余り、ミカンと花の里に、今年も主人公の「大見え」が咲く。(県代表監査委員・富永久雄)

一写一筆

静岡の今